様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３３３

研究課題名（和文）言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究

研究課題名（英文）Experimental studies on the correlation between linguistic and non-linguistic behaviors in the spatial frame of reference

研究代表者
田窪　行則（Takubo, Yukinori）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・所長

研究者番号：１０１５４９５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,770,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は言語表現と言語を用いない認知操作とで空間指示枠が相関するか否かを統制された認知科学的実験により確かめることを目的とする。宮古島では、テーブルの上の物体の操作を行うときに、相対指示枠（右左）でなく、絶対指示枠（東西南北）を用いることが確かめられた。統制群である東京方言話者の実験では相対指示枠を用いており、両者の差が統計的に優位であることが確かめられた。インドネシア、ラマホロット語を母語とする話者に対する実験では、その空間指示枠が固有指示枠（山向き、海向き）であることを確かめ、そのシステムを記述した。これらの成果をこれまでいくつかの学会、講演会で発表し、国際誌に掲載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
言語が思考を決定するといった強い形の言語相対性仮説に対しては否定的な見方が多いが、空間認知のような特定の領域の認知操作で言語使用と非言語認知過程に同様の操作が関わっていることは一概に否定できない。本研究では、二重言語話者において、使用言語によって絶対指示枠と相対指示枠の使い分けが見られることを示した。この結果は言語相対性仮説を支持するというより、この使い分けが伝統的家屋の建築様式や村の作り方など文化的なフレームの使い分けとかかわっていることを示している。この点で本研究は言語相対性仮説に関して新しい見地を提供している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate, in controlled cognitive experiments, whether spatial frame of reference in verbal and non-verbal cognitive operations are correlated. In Miyakojima Island, the participants when speaking in Miyakoan used absolute (east-west-north-south), rather than relative (right-left), frames of reference when manipulating tabletop objects. Speakers of Tokyo dialect, a control group, used the relative frame of reference, and the difference between the two groups was statistically significant. In experiments with Lamaholot speakers in Indonesia, we confirmed that the spatial frame of reference was geocentric (mountain-oriented, sea-oriented). These results have been presented at several conferences and lectures and published in international journals.

研究分野：言語学

キーワード：空間指示枠　相対指示枠　固定指示枠　絶対指示枠　二重言語使用　空間認知　言語相対性仮説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

言語形式と空間認知との相関はこれまで言語人類学的な研究を中心に多くの研究が行われてきた。Levinson[１]は「右、左」といった語彙がなく、代わりに「川の上流、下流」など地形を利用して空間や方向を指示する言語や「東、西、南、北」などの語彙をテーブルの上といった狭い空間にも使用する言語を報告している。これらの現象は日本でも井上[２]の紹介によって広く知られてきた。「右、左」は認知主体である人間をエゴセンターとしたいわゆる「相対的指示枠」であるのに対して、「川の上流、下流」は事物の固有の方向を利用した「固有指示枠」、「東西、南、北」は人間や事物の固有の方向とは独立した「絶対指示枠」である。共通語でも大きな空間では、「銀閣寺は京都の東にある」、「琵琶湖は京都の東にある」のように「東、西、南、北」などの絶対的指示枠が使われるし、京都では住所や方向を指示するのに「上がる、下がる」「西入る、東入る」等の「南、北、東、西」と結びついた絶対指示枠が使われるが、テーブルの上のものを指示するのに「ビールの東のコップを取って。」とか「東の奥歯が痛い。」などということはない。

日本国内でも琉球の諸地域では「東、西、南、北」を身近なものを指示するのに使われることが報告されている[３、４、５]が、これまで統制された実験によってこれを確かめたものはなかった。研究代表者の田窪は、琉球宮古語大神の方言調査の際、方角ではなく、家の中のものの位置に関しても「これはどこに置くの」と言う質問に「冷蔵庫の東においておけ。」などという言語使用を観察していたが、この現象に対する本格的な調査は行っていなかった。

幸いアイマラ語の空間オリエンテーションと時間方向性の相関を関係し、この言語では未来が後ろ、過去が前の方向と相関することを実験的手法で発見した認知科学者の Rafael Núñez（UCSD 認知科学科）の知己を得ていたため、氏に共同研究を依頼した。氏はパプア・ニューギニアの言語で固有指示枠を持つ言語でも調査している。

宮古島ではすべての話者は日本語共通語との二重言語話者であり、空間認知に関してもその影響を受ける可能性がある。本研究では、この二重認知、二重言語の影響を排除するために共通語の影響を抑えるために、被験者の母語による教示を行い、さらに統制した実験を行い、統計的検定を行った。

２．研究の目的

本研究は、言語の違いが方向認知にかかわる認知操作に影響しているのか否かを十分に統制された認知科学的実験により確かめることを目的としている。

琉球諸語の母語話者は高齢であるため、記憶等さまざまな要因が干渉していないかを確かめる必要がある。そこでコントロール群として東京方言話者でも 60 代以上の高齢者で実験を行い、記憶や他の要因（たとえば都会生活の果たす要因）を確かめた。

これらの実験と並行して、固有指示枠を用いて指示を行う言語（東インドネシアのラマホロット語）が話されている地区で実験を行った。

それぞれの地区での結果を統計的に解析し、言語的実験の結果と非言語的結果の相関を調べた。

言語相対性仮説に関しては言語が思考を決定するといった強い形のものに対しては否定的な見方が多いが、空間認知のような特定の領域の認知操作で言語使用と非言語認知過程に同様の操作が関わっていることは一概に否定できない。空間指示枠において言語相対性仮説が成立することを統制された実験により検証することを目的とした。同時に二重言語話者において言語相対性仮説が成り立つのかについても考察した。

３．研究の方法

3.1　相対指示枠か絶対指示枠か

当初の実験のデザイン及びプロトコールは基本的に Max Planck で使われている実験デザイン Majid et al.[6]に、高齢者用に必要な変更を加えたものである。A.言語的実験と B.非言語的実験を行ったが、Majid et al.の方法を用いた B の実験では、高齢者に記憶の負担をかけすぎることがわかったため C の実験をデザインし、それを用いた。

A.言語的実験のデザイン

L1）スクリーンで区切られた机に座ってもらった二人の被験者の間で行う（図１）。

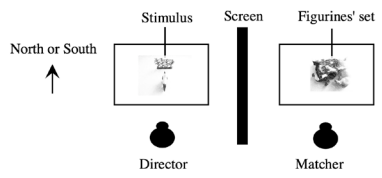

図１

L2）机の上に置かれた３つの動物のフィギュア（固有の前後を持つ）とサトウキビのフィギュア（固有の前後を持たない）を二人の被験者にみせ、それらがなんであるか、当該の言語で同定してもらう。
L3）４つのフィギュアのうち２つを選び一列に並べ、一人の被験者に対し、もう一人の被験者が同じように並べられるように隣の被験者に当該の言語で指示してもらう。この時フィギュアの並べ方は乱数表を使い、可能な組み合わせからランダムに選ぶ（図２）。

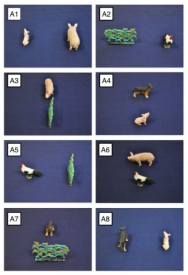
図２

L4）並べ終わった後、スクリーンを取って確認してもらう。
L5）交替して（L2-L4）を繰り返してもらう。L6）並べ方がどの程度正確であるかを記録する。
L7）被験者が向く方向は東西南北と４通りになるようにする。北と４通りになるようにする。
L8）話された内容を書き起こして、指示に絶対指示枠的表現を使うか相対指示枠を使うか、その比率を計算する。

C. ジェスチャーを用いた実験
　当初予定していた非言語的実験 B は高齢者の記憶に負担をかけることがわかったため、それほど負担をかけないジェスチャーを用いた実験を Núñez がデザインした Núñez et al.[7]。

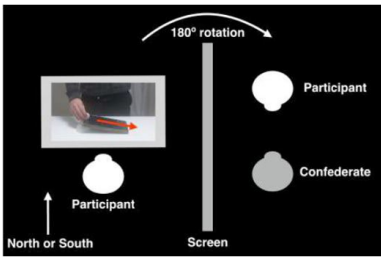

図３

［刺激］
C1）黒か白の板と黒か白のボールを用いる。板とボールの色は異なるようにする（白黒 C11、黒白 C12）。
C2）ボールの動き：板の上に転がすか（C21）、跳ねさせるか（C22）。
C3）板の向き：板が東向きに下るか（C31、西向きに下るか（C2）。
C21、C22、C31、C32 と、C11、C12 の黒白の組み合わせで８通り。
C4）被験者と刺激提示者は対面する。被験者が北（C41）、南（C42）の２つの方向のどちらを向くかで２通り。

［実験手順］
C１）ボールと板の白黒の組み合わせ。
C４）刺激提示者が北を向くか、南を向くか。
（C1）、（C4）を選ぶ。（C1）は交互に選び、（C4）はランダムに選ぶ。この４通りの組み合わせと、（C1）（C2）の４通りの組み合わせで 16 通り。

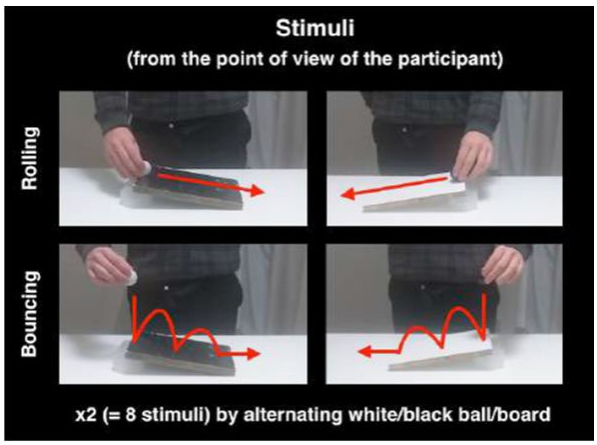

図４

　このあとに被験者に遮蔽物で仕切られた空間に移動してもらい、180 度回転して、ひじ掛けのない椅子に座る。そして、被験者に何を見たかを話してもらう。話を聞く相手は刺激提示者とは異なるものが行い、実験は見ていない。対話相手は被験者が自然に話せるようにその母語に堪能な人を選び、主として話を聞く。ジェスチャーを観察し、撮影する（図４）。一人の被験者は C11, C12、C21, C22 の４通りの試行を必ず行う。

［コントロールとしての東京話者］A、C の実験を、東京方言の 60 代以上の高齢者に対しても行った。さらに、追加で、C の実験を行った。
　以上の実験は固定カメラで撮影する（C については２台のカメラを使用）。教示は原則として当該言語でおこなう。実験が終わったあと非言語的実験に関しては使用した刺激とその結果をそれぞれ記録し、統計処理を行った。言語的実験では書きおこしを行い、使用された指示がどの指示枠にあたるかを記録し、統計処理を行った。

３.２　固定指示枠言語に関する調査

分担者の長屋が固定指示枠を持つ言語であるラマホロット語に対して調査を行った。方法は主としてフィールド調査およびオンライン追加調査である。

ラマホロット語（Lamaholot）はオーストロネシア語族中央マレー・ポリネシア語派に属する言語で、インドネシア共和国フローレス島東部およびその周辺の島々で話されている。この言語のほとんどの方言は山と海とに挟まれた海岸線沿いの村々で話されており、この地形的環境を反映してか、rae「山」や lau「海」、teti「天」、lali「地」という地理的ランドマークにもとづく空間表現、すなわち方向詞を持っている。ラマホロット語ではこの方向詞を用いて空間参照を行う。

現地でのフィールド調査およびオンライン追加調査の結果に基づいて、方向詞、地形、ならびにこの言語の文化･環境との関係について考察し､地形を利用した固有指示枠の性質を考察した。

４．研究成果

４．１　実験結果について

[実験 A の結果]

24 名（13 人男、11 人女）の被験者について宮古語話者が宮古語で行う実験（MM 8 人)、宮古語話者が共通語で行う実験（MJ8 人)、東京方言の話者が共通語で行う実験（JJ8 人）の 3 グループで行った。

MJ、JJ グループでは相対指示枠を選び両者で統計的差はなかった（t(6)=1.4;n.s.)。MM グループでは絶対指示枠が選ばれ、他のグループと優位な差があった（F(2,21) =23.1; p<.0001; eta squared = 0.69)。この実験に関しては Celik et al.[8]を見られたい。

［実験 C の結果]

実験 C は、宮古（平均 83.2 歳、SD8.13)、石垣の白保（平均 83.63 歳、SD8.13)、東京（平均 73.47 歳、SD4.49)で行った。

全般に宮古、白保では絶対指示枠を用いたジェスチャーが東京話者よりこのまれた：(宮古平均=71.09%, SD = 23.7%; 白保平均 81.25%, SD = 34.72%)、東京（平均 = 40.9%, SD =30.15%). 具体的な数値をあげると絶対指示枠を用いたジェスチャーが 50%以下の被験者は宮古（11 名中 1 名；9.1%)、白保（8 名中 1 名；12.5%）に対し、東京（11 名中 5 名；45.5%）であった。また、試行の 75%以上に絶対指示枠を用いたジェスチャー使った被験者は宮古（11 名中 5 名；54.5%), 白保（8 名中 7 名；87.5%）に対し、東京（11 名中 2 名;18.2%)。3 グループの One-Way ANOVA は統計的に優位（F(2,27) = 5.10, p = 0.013)で、大きな主効果を示す(η2 = 0.27)（see Figure 4)。他の統計結果に関しては Núñez et al.[9]を見られたい。

４．２　固定指示枠言語に関する考察

固定指示枠言語に関しては調査の結果、以下の結果を得て、Nagaya[10]として公刊された。

第一に、ラマホロット語の方向詞による空間参照はこの言語を話す人々の文化や環境と深く結びついている。方向詞は社会慣習や神話、生活様式と深く結びついている。

第二に、方向詞は使われる文脈によってさまざまな意味を持ちうる。村の内部での方向を表現する場合には、rae「山」や lau「海」、teti「天」、lali「地」という意味を表現するが、村の外部では teti「島の東端」、lali「島の西端」という意味を表す。

第三に、方向詞はランドマーク基盤型の空間指示枠を構成している（図５参照)。

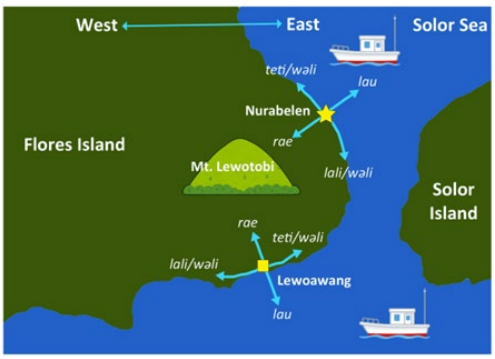

図５

方向詞による空間指示枠は、表現しようとする空間の配置に山の方向や海の方向という地理的環境に基づく外部の指示枠を押しつける点で絶対的指示枠に似ているが、一方で、山の位置によって方向詞が指す方向が変化するという点において固有的空間指示枠に似ている。本稿ではこのような性質をもつラマホロット語の空間指示枠をランドマーク基盤型の空間指示枠と分析した（Bohnemeyer and O' Meara [11] 参照)。この方向詞による空間指示枠は重要である。なぜなら、この言語は固有的空間指示枠を持つものの、その使用は主として人間が参照物である場合に限定され、相対的空間指示枠を持たないからである。

４．３　まとめと展望

今回、実験 A により、宮古語話者が宮古語で話す場合、絶対指示枠を用い、宮古語話者が共通語で話す場合と東京の話者が共通語で話す場合は相対指示枠を用いることが分かった。実験 C のジェスチャーを用いた実験でも、この傾向は宮古語母語の被験者、八重山語白保方言母語の被験

者において確かめられた。

この結果が言語相対性仮説を支持するものか反証するものかは自明ではない。宮古語、八重山語白保方言の被験者は、すべて共通語とのバイリンギュアルであり、しかも、これらの言語は絶対的指示枠である「東西南北」以外に、相対的指示枠を用いる「右、左」も持つ。つまり、話者はどちらの概念も用いることができるので、これらの相対的概念を持たない言語における絶対指示枠の使用とは異なるとみなければならない。これは、タスクの性質にもよる。A、C のように言語を用いてテーブル上のフィギュアの状況を再現してもらうタスクでは、相対的指示枠より絶対的指示枠の方が正確性を担保できる。実際、何人かの被験者たちはそのことを知っており、我々に右左より東西南北の指示の方が正確であると話していた。

つまり、これらの話者がなぜ「東西南北」が我々相対的指示枠を用いる話者が容易にわからない状況でも、正確に絶対的方位を意識できるのかという問題に帰着する。この状況は、Núñez たちが Aymara 語で確かめたような　‘cultural macro-views’と関連させることが可能である。彼らは Aymara では絶対的方位用語の使用は家を建てるときの方向と関係していることを発見した（Núñez & Cornejo　[11]）。同様のことが琉球のこれらの話者の地域の伝統的な家の建て方、家の方向についていうことができる。室内での入口、それぞれの部屋、床の間の位置は絶対的方位に基づいて決まっており、室内では絶対的方位が意識される。村の構造自体もそのようになっていることが多い。

固有指示枠言語に関してもその使用規則は文化や環境と深く結びついており、方向詞は社会慣習や神話、生活様式と深く結びついていることが分かった。

以上の考察をさらに追及すべく、2020 年、2021 年に実験や調査の計画を立てたが、Covid１９感染症のため、中止せざるを得なかった。特に、C の実験では東京の被験者の平均年齢が琉球 2 地区の被験者より 10 歳若かったため、必ずしも対照群として適切ではないとの指摘があり、追加実験を計画したが果たせなかった。そのため、当初予定していた国際査読誌へ投稿予定の論文の執筆ができなかった。

機会があれば、追加の調査・実験を行いたい。また、家の建て方、村の作り方に関しては琉球王府の風水に基づく指示があったことが文献によって確かめられる。これに関しても十分な調査ができなかったため、将来の調査の機会を待ちたい。

引用文献

[1]Levinson, S.C. (1996) Frames of reference and Molyneux’s question: crosslinguistic evidence. Bloom, P. et al. (eds.) Language and space, 109-169. Cambridge, MA: MIT Press.

[2] 井上京子(1998)『もし「右」や「左」がなかったら』大修館書店

[3]柴崎礼士郎、武黒麻紀子(2007)「石垣島における空間認知表現の予備的調査」『沖縄国際大学外国語研究』10(1)　83-97.

[4]Takekuro, Makiko. 2007. Language and Gesture on Ishigaki Island. Crane, Thera et al. (eds) *BLS* 33. 412-423.

[5]井上京子(2002)「絶対と相対の狭間で－空間指示枠におけるコミュニケーション」　大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』(シリーズ言語科学 3) 11-35,東京大学出版会

[6]Majid, Asifa, Melissa Bowerman, Sotaro Kita, Daniel B.M. Haun and Stephen C. Levinson.2004. Can language restructure cognition: the case for space. *TRENDS in Cognitive Sciences.* Vol.8 No.3. 108-114.

[7] Celik, Kenan, Yukinori Takubo, and Rafael Núñez. 2018. Spatial frames of reference in Miyako: Digging into Whorfian linguistic relativity. In S. Fukuda, M.S. Kim, M-J Park, & H.M.
Cook (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics Vol. 25.* Chicago: Univ. of Chicago Press (CSLI publications). 23-34.

[8] Núñez, Rafael, Kenan Celik, Natsuko Nakagawa. 2019. Absolute Spatial Frames of Reference in Bilingual Speakers of Endangered Ryukyuan Languages: An Assessment via a Novel Gesture Elicitation Paradigm. Proceedings of the 41st Annual Conference of the Cognitive Science Society.890-896.

[9]Nagaya, Naonori.2022. Directionals, topography, and cultural construals of landscape in Lamaholot. *Linguistics Vanguard* Vol.8. 25-37.

[10]Bohnemeyer, Jürgen & Carolyn O’Meara. 2012. Vectors and frames of reference: Evidence from Seri and Yucatec. In Luna Filipović & Katarzyna M. Jaszczolt (eds.), Space and time in languages and cultures: Language, culture, and cognition, 217-249. Amsterdam: John Benjamins.

[11] Núñez, Rafael and Carlos Cornejo. 2012. Facing the Sunrise: Cultural Worldview Underlying Intrinsic-Based Encoding of Absolute Frames of Reference in Aymara. *Cognitive Science* 36:965-991.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 長屋尚典	４．巻 33
２．論文標題 ラマホロット語の方向詞と空間参照枠	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文化交流研究: 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 33	６．最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 千田俊太郎	４．巻 19
２．論文標題 日本語の動詞語幹とアクセントに關する覺え書き	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『ありあけ：熊本大学言語学論集』	６．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 千田俊太郎	４．巻 -
２．論文標題 パプア諸語と日本語の源流	５．発行年 2020年
３．雑誌名 長田俊樹編『日本語「起源」論の歴史と展望 ： 日本語の起源はどのように論じられてきたか』 三省堂	６．最初と最後の頁 127－152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田窪行則	４．巻 13
２．論文標題 方言を仮名で書く―琉球宮古語池間方言を例に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ことばと文字	６．最初と最後の頁 102-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003446	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田窪行則	4．巻 153
2．論文標題 トコロの多義性を通じて見た言語，認知，論理	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語研究	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.154.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takubo, Yukinori	4．巻 -
2．論文標題 Morphophonemics of Ikema Miyakoan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 In: Kupchik Jose Andres Alonso de la Fuente Alonso de la Fuente, and Marc Miyake eds. Studies in Asian Historical Linguistics, Philology, and Beyond. Leiden: Brill.	6．最初と最後の頁 65～79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/9789004448568_007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Celik, Kenan, Yukinori Takubo and Rafael Nunez	4．巻 25
2．論文標題 Spatial Frames of Reference in Miyako: Digging into Whorfian Linguistic Relativity	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 千田俊太郎、金善美	4．巻 17
2．論文標題 「朝鮮語のkesita 文: 實演提示機能を中心に」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『ありあけ 熊本大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 長屋尚典	4．巻 39
2．論文標題 タガログ語の存在と所有のあいだ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京大学言語学論集	6．最初と最後の頁 223-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00074542	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　10件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 Nunez, Rafael; Celik, Kenan; Nakagawa, Natsuko
2．発表標題 Absolute Spatial Frames of Reference in Bilingual Speakers of Endangered Ryukyuan Languages: An Assessment via a Novel Gesture Elicitation Paradigm
3．学会等名 The 41st Annual Conference of the Cognitive Science Society（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 千田俊太郎
2．発表標題 ドム語の直示表現
3．学会等名 言語類型学研究会、京都大学
4．発表年 2019年

1．発表者名 Nakagawa, Nastuko; Yamada, Masahiro; Celik, Kenan; Kibe, Nobuko; Takubo, Yukinori
2．発表標題 Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report
3．学会等名 International Conference on Language Technology for All (LT4ALL), Paris（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Takubo, Yukinori
２．発表標題 How many languages are there in Japan?
３．学会等名 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田窪行則
２．発表標題 トコロの多義性を通じて見た　言語、認知、論理
３．学会等名 日本言語学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田窪行則
２．発表標題 ことばを生きる　ことばを残す
３．学会等名 第5回方言サミット（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamada, Masahiro et al.
２．発表標題 Experimental Study of Inter-language and Inter-generational Intelligibility:Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages
３．学会等名 26th Japanese/Korean Linguistic Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長屋尚典
２．発表標題 フィールド;言語学: 右も左もない言語と言語相対論の現在
３．学会等名 東京言語研究所・理論言語学講座・春期講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nagaya, Naonori
２．発表標題 Motion event descriptions in Tagalog,
３．学会等名 Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長屋尚典，天野友亜，榎本恵実，大久保圭夏，鈴木唯，髙橋梓，髙橋舜，田中克典，谷川みずき，福原 百那，山田あかり．
２．発表標題 経路の種類と経路表示 ―東京外国語大学における通言語的実験の成果―
３．学会等名 Prosody & Grammar Festa 3
４．発表年 2019年

１．発表者名 Celik, Kenan, Yukinori Takubo and Rafael Nunez
２．発表標題 Spatial frames of reference in Miyako: Digging into Whorfian linguistic relativity.
３．学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference, U. Hawaii at Manoa（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takubo, Yukinori
２．発表標題 Struggling with endangered languages in the Ryukyus
３．学会等名 EALL Talk Series, University of Hawaii at Manoa.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takubo, Yukinori
２．発表標題 The making of the digital museum of Nishihara, Miyako Island. The keynote lecture at the workshop
３．学会等名 NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and histories: Linguists' and Historians' Challenges, University of Hawaii at Manoa.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yamada, Masahiro
２．発表標題 Creating Contents for Language Learning: Collaboration with Language Communities
３．学会等名 NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and histories: Linguists' and Historians' Challenges, University of Hawaii at Manoa.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 長屋尚典
２．発表標題 タガログ語の存在と所有のあいだ
３．学会等名 日本言語学会第154回大会，日本言語学会，首都大学東京
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長屋　尚典 (Nagaya Naonori) (20625727)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	千田　俊太郎 (Tida Syuntaroo) (90464213)	京都大学・文学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	ＣＥＬＩＫ　ＫＥＮＡＮ (Celik Kenan) (70825596)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	
研究分担者	山田　真寛 (Yamada Masahiro) (10734626)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・准教授 (62618)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ヌニェス　ラファエル (Nunez Rafael)	カリフォルニア大学サンディエゴ校・認知科学科・教授	
研究協力者	中川　奈津子 (Nakagawa Natsuko)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・准教授 (62618)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関